

染色工程と支持体の関係 2

大阪芸術大学 工芸学科 准教授 舘 正明

むらに染まっている布は染色においては失敗とされる。そのむらを意図的に生じさせ、表現として利用するという考えから本研究は始まっている。むらとは「色の濃淡、物の厚薄などがあって不揃いなこと」(広辞苑第5版)とある。布を染める際に染料の多い少ないによって生じる濃淡もこの意味の解釈ではむらといえるが、これは本研究の対象外のもので、本研究では支持体である布の構造から生じるむらを対象としている。染色作品は描画材料の染料が、支持体の布に浸透し定着することで成り立っている。そのため油絵具やペンキのように支持体の表面を覆い隠すことは無く、作品を観る人は、布そのものの構造を見ることになる。私の近年の制作では布の織目が見えないような細い糸で織られた布を使用してきた。それは私がこれまで一貫して研究してきた「素材の生理を利用した表現」に起因するもので、染料の自然な動きを布の構造が妨げないようにするためだ。昨年度より「染色工程と支持体の関係」を研究課題とし、染めむらが生じるような布を用いて、さらには通常の染色工程ではむらが生じるため避けられてきた工程をあえて行い、染色工程と支持体の関係を継続して研究してきた。今年度は昨年の研究に加え、蠟染めの特徴である「重ね染め」も取り入れた。

蠟染めは防水性を持つ蠟を防染剤に用いる技法である。蠟が防染する力は強く、幾度の染色にも耐えることができる。その性質を利用し蠟染めでは蠟を布に塗る「蠟置き」と「染色」を繰り返す。残したい色の部分に任意の形で蠟を置くことで、蠟が次の染色によりその部分の色が変わることを防ぐ。蠟が置かれなかった部分は前の色と新しく染めた色が布の中で混ざり合い、第三の色があらわれる。これを重ね染めと呼ぶが、染色には「重色(かさねいろ)」と呼ぶものがある。「平安の美裳 かさねの色目」(長崎盛輝著、昭和63年2月28日、株式会社京都書院発行)に、「当時服飾に用いられた色彩には、裂を直に染め上げた「染色(そめいろ)」と、先染の経糸と緯糸で織り上げた「織色(おりいろ)」と、もう一つは、衣の表・裏の裂を重ねてあらわす「重色(かさねいろ)」(重色

目)の三通りの色があり、(後略)」とある。「重ね染め」にはここでいう「染色(そめいろ)」と「重色(かさねいろ)」のふたつを掛け合わせたような効果があると考え、染色工程と支持体の関係に、重ね染めを加えた実験を行い、布と蠟と染料、それぞれの素材の生理を利用した表現の研究を行った。

蠟染めでは求める色と形を作り出すため、制作工程を計画する。染めた色は必然的に重なり合い、減法混色により明度が減少し渋味のある色が作られ、その渋さが蠟染めの特徴ともなっている。本研究での「重ね染め」においては、従来の重ね染めによる減法混色の制約に囚われないものを考えていた。それを実現するため「脱蠟」の工程に注目した。脱蠟は布から蠟を取り除く工程を指し、蠟置きと染色を数回繰り返した後に行うことが通例だ。本研究においてはその脱蠟を、蠟置きと染色の度に毎回行うことで、「染色(そめいろ)」と「重色(かさねいろ)」のふたつを掛け合わせたような効果を得ることができないかと考えた。実験は代表的な「重色」の中から数種を選び、「蠟置き、染色、脱蠟」をそれぞれの色ごとに繰り返した。結果は予想した通り、使用した2色とそれらの混色による1色の合計3色が染められた。この結果は実験としては問題の無いものであるが、ここから繋がる表現としては十分ではなかった。この結果を踏まえ、制作においては「重色」に追加の1色を染めることで、それらの色彩が互いに干渉する効果を引き出すことを考えた。また、支持体の布についても昨年度からの研究を生かし、数種の布を使用することで蠟の防染効果やテクスチャに変化を持たせた。本研究において支持体となる布、防染による蠟、重色+1色による染料、それぞれの素材の生理を利用した表現をまとめることができ、この結果を新しいシリーズ作品「stream」として展開したい。